

～ふくしまの古民家探訪～

国登録有形文化財

奥山家住宅及び洋館 (国見町)



洋館の全景



洋館内部



居間の戸板の彫刻

奥山家の住宅及び洋館は、共に大正10年の竣工です。家業は江戸末期から昭和初期にかけて、呉服屋・地主・金融業等を営み、明治からは製材業も営んだと言われていいます。庭園は、当地が江戸時代に藤田宿の本陣があった場所で、そのなごりを残していると言われていいます。

特筆すべきは、住宅のいたるところに彫刻が施されており、特に居間の戸板（桂の一枚板）4枚には、七福神が計100人彫られています。

洋館の天井レリーフは、漆喰造に見えますが、実は木彫刻で作られています。

また、大規模な石蔵1棟と土蔵3棟は、東日本大震災（H23）にて損壊したため解体しています。



洋館と住宅の全景

[文と写真：新聞 永 (H24.8.25)]

佐藤家住宅

(福島市泉地区)



住宅の全景

佐藤家住宅は、明治6年に建築され、周囲は田園風景が広がっていましたが、今では住宅市街地となり、ひときは目立つ茅葺き民家です。東北地方でよく見られる兜屋根ですが、その大きいことには圧倒されます。

また、東妻面の造作と広い芝生の前庭は、まるでヨーロッパの古民家を思わせるような風情です。

小屋組は、力強い合掌造りの大空間で、養蚕に利用した形跡も見られます。養蚕は昭和10年頃まで営みましたが、主には米を生産する豪農でした。

庭には、ここの地名の由来でもある「泉」が今でもこんこんと湧き出ています。

都市の中に残るオアシスとも言える、まさに「異空間」です。

[文と写真：新関 永 (H22.9.15)]



住宅の内部(囲炉裏)



こんこんと湧き出る泉

～ふくしまの古民家探訪～

境野家住宅 (福島市飯野地区)



住宅の全景

境野家住宅は、阿武隈山地の山沿いに建つ築150年の茅葺きの豪農の館で、16年前に往時の面影を損なうことのないように改修工事を行い再生しています。

平地の乏しいこの地方では、谷沿いの平坦部を田畑に、山際を宅地としますが、背後の山と防風林が冬の強風を遮り、横井戸により湧水を引き込み、地形をうまく利用して建っています。

[文と写真：新関 永 (H22.12.12)]



住宅の内部(囲炉裏)



～古民家探訪～

旧白州次郎・正子邸

武相荘 (Buaiso) (東京都町田市)

住宅の全景



「無駄のある家」

鶴川の家を買ったのは、昭和十五年で、移ったのは戦争がはじまって直ぐのことであった。別に疎開の意味はなく、かねてから静かな農村、それも東京からあまり遠くない所に住みたいと思っていた。現在は町田市になっているが、当時は鶴川村といい、この辺に（少なくともその頃は）ざらにあった極くふつうの農家である。手放すくらいだからひどく荒れており、それから三十年かけて、少しずつ直し、今もまだ直しつづけている。

もともと住居はそうしたもののなので、これでいい、と満足するときはない。綿密な計画を立てて、設計してみた所で、住んでみれば何かと不自由なことが出て来る。さりとしてあまり便利に、ぬけ目なく作りすぎても、人間が建築に左右されることになり、生まれつきだらしない私は、そういう窮屈な生活が嫌いなのである。俗にいわれるように、田の字に作ってある農家は、その点都合がいい。いくらでも自由がきくし、いじくり廻せる。ひと口にえば、自然の野山のように、無駄が多いのである。

牛が住んでいた土間を、洋間に直して、居間兼応接間にした。床の間のある座敷が寝室に、隠居部屋が私の書斎に、蚕室が子供部屋に変わった。子供たちも大人になり、それぞれ家庭を持ったので、今では週末に来て、泊まる部屋になっている。あくまでも、それは今この瞬間のことで、明日はまたどうなるかわからない。そういうものが家であり、人間であり、人間の生活であるからだが、原始的な農家は、私の気ままな暮らしを許してくれる。三十年近くの間、よく堪えてくれたと有りがたく思っている。

～ 白洲正子著 「縁あって」より ～

[写真：新関 永 (H23.1.14)]



矢吹家住宅

(福島市成川地区)



住宅の全景

矢吹家住宅は、明治45年の建築で、当初は茅葺きだったようです。

大きな薬医門の戸板はケヤキの1枚板で作られ、周囲を取り囲む堀や立派な漆喰の土蔵から、当時の繁栄ぶりがうかがえます。

特に、客人の間として使われた蔵座敷は、床柱に檜の四方柱、建具に鉄刀木を用い、細かい組子の欄間など、丁寧に造られています。

また、庭にも水路を取り込み、庭石、植栽とも手の込んだ造りとなっています。大きな庭石を、100人超の地区住民で運ぶ様子を撮した写真が遺されています。

[文と写真：新関 永 (H22.7.24)]



住宅の内部



薬医門

～ふくしまの古民家探訪～

国登録有形文化財

嶋貫本家住宅 (福島市瀬上町地区)



住宅の全景(震災前)



中庭



住宅の内部



洋間

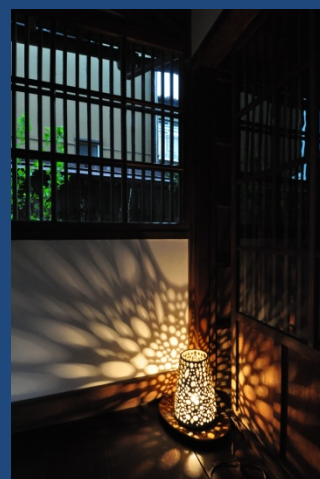
嶋貫家の歴史は300年前に遡り、上杉藩の家臣として、新潟、会津、米沢、そして嘉永年間（1848～1854）福島に移り住んだと言われています。

江戸時代の瀬上は、宿場であり花街でもあり、大いに賑わう中で、商人として金融業を営んでいました。

今の住宅は明治32年起工し40年に完成したとの記録があり、座敷毎に床の間を設え、紫檀、黒檀、鉄刀木と銘木をふんだんに使い、まさに贅を尽くした造りとなっています。

また、着物、箆笥、金庫、電話機、人力車など、往時の調度品を大切に保存していて、まるで丸ごと博物館のようです。

[文と写真：新関 永 (H24.5.17)]



～ふくしまの古民家探訪～

国登録有形文化財

阿部家住宅 (福島市笹木野地区)



住宅の全景

阿部家住宅離れ座敷は、明治中期に建築された木造平屋建て瓦葺きの和風情緒あふれる建物です。

古くから洋梨の生産を行ってきた豪農であり、現在の御当主は18代目にあたります。

家屋と庭園を活用し、上質な和の空間を、多くの方に味わってもらおうと、能、お香、お茶会、サロンコンサート、結婚式などを開催しています。

[文と写真：新関 永 (H22.8.22)]



内部



庭園



土蔵

なかむらや旅館（福島市飯坂温泉地区）



旅館の全景

なかむらや旅館は、本館が江戸期、新館が明治29年頃の建築とされています。

新館客間には、紫檀、黒檀、鉄刀木の銘木を使った床の間や、彫刻を施した欄間など、豪華な造りが見られます。

当時ここ信達地方は養蚕が盛んであり、絹織物業で栄華を極めた旦那衆が、商談や接待に使ったものと思われます。

棟梁は、この地の小笠原国太郎と伝えられています。廊下の手摺には、洋風デザインが見られますが、この後、擬洋風の亀岡家住宅の建築に携わっているとのことで、その前触れとも思われます。

[文と写真：新関 永（H23.8.11）]



玄関部分



新館客間



廊下の手摺

～ふくしまの古民家探訪～

梅津家住宅 (福島市土船地区)



住宅の全景

梅津家は、元和3年（1617）の大晦日に信濃国（長野県）からこの地に移り住んだと言われています。

庭にある、福島市指定天然記念物の「忍びの松」の説明書きに経緯が書かれています。

現在の住宅は、明治13年に建築され、その後に屋根を茅葺きから銅板葺きに、窓を木製二重サッシに改修していますが、広い土間や囲炉裏を残し、外観内部とも、往時の面影を壊さないように心がけています。

違い棚の造りも「松」という名称の造りだそうです。

[文と写真：新関 永（H23.9.17）]



玄関土間



座敷床の間と違い棚

～ふくしまの古民家探訪～

渡邊家住宅 (福島市大森地区)



住宅の全景

渡邊家住宅は、江戸末期に建てられました。家業は長年醤油製造業を営んでいて、今も区内では通称「見附の醤油屋」と呼ばれています。福島市内では珍しく大きな座敷蔵（22.5畳）を備えているのが特徴です。竿縁は4間半通っています。

平成24年に「ART SPACE月光醤油」として、表現の場、集いの場として誰もが利用できる場として開放しています。

[文と写真：新関 永 (H24.10.27)]



玄関土間



座敷蔵の外観



座敷蔵の内部